



新潟の水辺だより

Vol.38

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1996年7月30日 Vol.38

TOPICS

通船川地元地域で初の合同シンポ

6月29日(土)新潟市中地区公民館において、「通船川シンポジウムin中地区ーよみがえれ!ふるさとの川ー」が開催された。

このシンポは、通船川の再生を地元地域から考えようというもの。主催した「中地区を考える会」(井上 秀雄会長)は、通船川の右岸に広がる中地区(山ノ下、河渡、下山等の地区の総称)の町内会、自治会、企業で組織する住民の町づくり団体。昨年の11月に続いて二度目の通船川をテーマにしたシンポとなった。今回は左岸にあたる、木戸地区と沼垂地区の同じく住民団体である、「栗ノ木川、通船川問題連絡会」と亀田郷地域センターに呼びかけ、関係地域が初めて合同で通船川問題を語り合った、画期的な取り組みとなった。当日の参加者は95名。

通船川ネットワーク(新潟の水辺を考える会、通船川ルネッサンス21、新潟市東地区公民館)もシンポの協力団体として参加し、つい先頃まとめたばかりの研究レポート「市民参加による身近な水辺回廊の再生手法の研究ー都市河川回廊・通船川を事例として」を報告する、最初の機会となった。



通船川ネットワークの研究報告 左から大熊、星島、高橋(正)、高橋(誠)

●通船川ネットワーク報告内容

1. 概要: 通船川ネットワークの経緯、研究の目的など 大熊 孝
2. 歴史的視点、社会環境、再生活動の現在など 星島 卓美
3. 通船川の自然: 魚類、水生昆虫、植物、野鳥について 高橋 正良
(以上、通船川ネットワーク世話人)

4. 亀田郷の治水の歴史、排水システムの現況 高橋 誠(亀田郷地域センター)

ーシンポではー

栗ノ木川、通船川問題連絡会事務局長の長井久蔵氏より昭和30年代におきた地下水溶性ガス汲み上げで、通船川周辺に地盤沈下がおこり、川が天井川となり、そこに新潟地震が襲い堤防が切れ、大きな被害を被った苦い体験が披露された。この災害を契機に、亀田郷土改の故佐野藤三郎理事長が中心となり、農民と地域住民が力をあわせ立ち上がり、通船川の低水路化、山ノ下閘門と排水機の設置などの対策を勝ち取ってきた、貴重な体験も報告された。しかし同時に、周辺の工場や家庭排水が川に流れ込むことになり、環境汚染が進行し、これとの闘いだったともいう。

ー行政マンの本音に心うつー

今回初めて、河川管理責任者である行政から、県新潟土木事務所泉 達尚所長がパネリストで参加した。泉所長は通船川の地震による復旧事業にも係わり、通船川には関心を持つ一人。新潟県河川課長も歴任した、県河川行政のベテラン。

泉所長によると、県新潟土木では昭和50年代初めより、烏屋野潟の環境・治水対策に関連し、栗ノ木川、通船川も調査を進めてきたこと。昭和60年代の金子県政の時代には、木材不況に関連し、木材団地を宅地化し川を埋め立て道路とする計画が浮上したこと。この案は県河川課の反対と金子知事の退陣で、立ち消えになったことが初めて明かされた。

通船川の現況では、護岸の矢板が地震復旧の応急工事だったこともあり、仮設用の薄い矢板も使用され、現在、腐食率50%。後10年もたないのではと言う人もいるとのこと。同じくポンプ場も老朽化しており、こちらは後5~6年の耐用ではと指摘した。通船川には雨が降ると1秒間に63トンの水が落ちる。本来流域全体

のネットは50トンだが、貯木場の貯水機能で補っているという。

通船川流域は新潟市産業の心臓部、周辺には約13万人が暮らす。川の改修は早期の課題だが困難も多い。河川そのものの改修に約300億円、これに親水公園や多自然工法等の環境対策を含めると約450から500億円。更に閘門改修に約100億円の費用が見込まれ、大事業となるとのことだ。ただ、新津川改修事業のように、県や県の出先機関、それに地元市町村の行政担当者と地域住民の熱意がかみあい、役割分担をうまくやれば、新たな事業の展開も夢ではないと励ました。



行政と住民の熱意がかみ合うことが必要だと語る 泉 達尚 県新潟土木事務所長

行政マンのめったに聞けない本音の話を、シンポに参加した人たちからは示唆にとむものだったと、感想がよせられた。

ー通船川の改修は地域連携でー

今回主催した井上(中地区を考える会)会長は「市民が水との関わりを楽しめる場所になりうる環境資源として、通船川を見直すことが大切。夢のある未来に向け、関係者の知恵を結集したい」と呼びかけ、関係地域の連携で通船川改修の機運を盛り上げるため、次回から地域持ち回りの「集い」を提案した。

浅井 敬一・小泉 伸之

通船川シンポジウム in 中地区に参加して

6月29日（土）に行われた通船川シンポジウムに参加して、特に、パネルディスカッションのコーディネータを務めて感じたことを簡単に述べておきたい。

このパネルディスカッションでは、私が参加した最近のシンポジウムの中で最も本音が語られ、問題点が浮き彫りにされたものであった。その問題点とは、通船川を改修する場合に、概算で約550億円かかるということであるが、その費用を誰が負担するかという点である。

通船川の管理は、信濃川水系に属するため建設大臣管理の一級河川に指定されているが、小規模河川ということで新潟県知事に管理が委託されている。県管理とはいえ、通船川は新潟市内の小河川に過ぎないため、広域的な行政を主眼とする県費や国費は投入しにくいとのことであった。一方、新潟市は、一級河川であるから、国が費用を出すべきであるという観点にたっている。要は、通船川は、河川法的解釈では河川改修費が出にくい河川であることが明らかとなったのである。

通船川は、確かに面積的には県土の0.2%にも満たない流域面積しかないが、排水が流入することで関係する人口は約25万人にもなり、県人口の1割にも達する重要な都市河川である。この河川は、法的仕組みがどうであれ、国、県、市が協力して改修せざるを得ない河川である。今後、地域住民の運動として、国、県、市に費用を捻出させる論理をどう構築していくかが重要課題であると考えられる。そのためには、地域住民も通船川の改修によって多くの利益を受けるのであるから、なんらかの犠牲を払う必要があると考えられる。その一つの方法として、都市計画法に則って通船川沿川地域の区画整理を行い、減歩によって河川改修に必要な土地を生み出しことを提案しておきたい。真の川造りや町造りは、国、県、市および住民が“いたみ”を分け合うことによって初めて可能となる。

大熊 孝

ラムサールシンポジウムにむけて 1

去る6月22日に赤塚の商工会館を会場として、第2回のラムサールシンポジウム新潟地域実行委員会が開かれました。わたしは、赤塚の商工会館へ初めて入ったのですが、2階がらは佐潟を一望できる素晴らしいロケーションです。佐潟をポーとして眺めるのにより場所でおススメです。雨の日なんかもいいと思います。



実行委員会の模様

当日は40人程の方々の出席があり、まずは佐潟の鳥の声をバウクに千葉 晃さん（新潟県野鳥愛護会）から佐潟の鳥類についてレクチャーしていただきました。その後、これから新潟で担当していく仕事などについて活発な意見がかわされました。新潟で担当していく仕事というのは、主に11月28日午後の開会セレモニー（万代市民会館）、11月28日夜のレセプション（会場未定）、11月29日夜の記念シンポジウム（新潟市民プラザ）、11月30日午前のエクスカッション、11月30日午後の佐潟セッションです。これらの詳細についてはこれから検討していくことになります。

また、いきなり11月に大きなシンポジウムをするよりも、その前にイベントとして、何かしようということになりました。もともとは、東京のラムサールセンターからきた話ですが、新潟での動きを大切にしていきたいと思っています。会員の皆さんもご協力ください。

八木 栄子

山の下閘門、新栗ノ木川ウォッチング

6月23日(日)、新潟市東地区公民館の環境講座において、山ノ下閘門排水機場、新栗ノ木川ウォッチングが行われた。参加者は、通船川ネットワークが主体で49名であった。当日は快晴ではなかったが、なかなか暑い日であった。

山ノ下閘門では、職員の方から施設の概要を説明いただいた後、特別に閘門をあけていただいた。通船川、栗ノ木川とその河口にあたる信濃川では水面差は約2mあり、ゲートを開けると同時に信濃川から流れ込んでくる水を見て、はじめて水面差を実感し、歓声をあげる人もいた。また、閘門操作により攪拌された水の匂いもなかなかのものがあり、通船川・栗ノ木川の水質の悪さも実感した。今回を逃した方は、今後の機会に是非見ていただきたいと思う。

通船川や栗ノ木川沿川地域からは、新聞などでも報じられているとおり、老朽化した山ノ下閘門排水機場の作り替えが望まれている。海外では、観光名物になっている閘門がり、通船川や栗ノ木川で水辺回廊が再生される事が現実化すれば、ここも一つの名所になっていくのではないかなと思う。



山ノ下閘門の開く様子。水面の高さの違いに注目

続いて新栗ノ木川で、井上 信夫さんが前日から仕掛けておいてくれた刺し網を引き上げ、近くの公園で魚を網からはずし、魚の観察会を行った。通船川と同じように劣悪な水質環境なため、フナやハヤなどの汚濁や水中酸素の欠乏にも比較的強いモノが多かった。

ウォッチングの楽しみの一つは星島 卓美さんが用意してくれる昼食で、今回のメニューはシーフード炊き込みピラフとみそ汁でおいしかった。午後からはみんなでゴミ拾いをしながら、新栗ノ木川をウォッチング。振り返ってみると、ゴミを拾いながらというのは初の試みであった。今後も続けていくべきだと思う。

ゴミが多くて汚いという話は良く聞くが、どれだけゴミが多くて汚いかというのは一度、ゴミ拾いをしなければわからない。

新栗ノ木川の右岸側は、栗ノ木川治水記念公園として、遊歩道を備えた公園・緑地が連続している。水際の金網や矢板の護岸などを除けばなかなか快適な散歩道だと思う。水が汚かったり、落ちたら危険ということはあるが、それでも水辺を歩ける様になっているのは気持ちのいいことである。

杉山 泰彦

通船川クリーンアップ*作戦 実行委員会設立準備会

7月24日(水)、新潟市東地区公民館において、通船川クリーンアップ実行委員会の設立準備会が行われた。通船川ネットワークから沿川の企業、自治体に呼びかけ、沿川企業6社、木戸育成会、通船川ネットワーク6名の計13名が出席した。

きっかけは星島 卓美さんが新潟市東山ノ下小学校の生活科の授業で1時間通船川について話をした事に対しての子供たちのゴミがたくさん落ちているという作文からだった。

会議では10月に一度クリーン作戦ができないかということ、実施にあたっては沿川の自治体、企業、個人、団体が対等な立場で参加する実行委員会形式で行いたいということなどが述べられ、それに対して意見が述べられた。

通船川沿いは全川歩いていけるわけではないため、企業などの敷地の立ち入りはどうか。実際ゴミを拾っても集めたゴミを山にしておけないので、新潟市の協力も必要であるという意見などである。

また、そもそも何のためにきれいにするのかということも明確にしておく必要があるという意見があり、今後通船川の改修を考えていくには地域の人々の通船川に対する愛着も大きな指標になるのではないかと議論された。

実行委員会を組織する前に出席者を中心に発起人会を組織して実行委員会の参加を呼びかけようということになった。

今回の会議は、別の意味で大きな意義があったと思う。それは通船川ネットワークと沿川の企業の方と同じ席につくことができた事だと思う。

通船川で材木を運んだり、工業用水に利用したりはしているが、ゴミを直接通船川に投棄しているわけではない。現在の通船川の様子はとても水辺というイメージではなくただの水路である。と、企業の方からの話が印象的だった。

杉山 泰彦

学ばべきことと、そうでないこと 国際水辺環境フォーラムinスイスに参加して その2

(新潟の水辺だよりVol.37 1996年5月発行の続きです)

■横工のない砂防河川

ウィリアム・テルが活躍したスイス建国の地とされるファブアルトシュテッター湖に注ぐロイス川という荒廃急流河川がある。

1987年8月、大洪水が発生し川床洗掘によって、高さが20m以上はある高速道路のピアが宙吊りになり、線路が流され、教会の土台が削りとられた。

この災害復旧は、低下した河床から更に7mも深く根入れした重力式護岸をつくる工法でおこなわれた。

巨大な護岸をつくるより、床固工などの横断工物を併用した工法が経済的で河床を安定させる効果も高いと考えるのが普通であろう。なぜかこのような工法は、検討の候補にも上がらなかったという。

スイスは砂防工事では日本の大先輩の国である。なぜこうなったのか、いまだに疑問がこの事例である。

あえて、うがって、湖で砂利採取業者が40万m³/年の採取を行っており、デルタ部の自然回復のために年間1,200万円を拠出しているという事情に関連する工法なのだろうかなどと考えてもみたが、よく分からない。



二次改修によって作られた、水衝部の上向不透過型石積み水制

■ランドシャフトという概念

アーバン・デザイン……(建築)、シビック・デザイン……(土木)、ランドスケープ・デザイン……(造園)等環境設計の呼び方はさまざまである。

スイスでは例えば、自然ランドシャフト、近自然文化ランドシャフト、技術・工業ランドシャフトなどの区分を行っている。

1967年の連邦法は、すべての公共施設とその運

営に際しては、ランドシャフトとその自然・文化価値にたいして最善の方法で配慮することが義務付けられている。



堤防に林立する巨木。冷や汗が流れるのは日本人的感覚というものか。

こう見てくるとランドスケープ＝ランドシャフトではないのである。

自然、文化、習俗、景観を包含した一定の圏域ともいべき概念が、ランドシャフトという言葉の中にあるような気がしてくるのである。

このような立場からの川づくりは、河川工学、生態学、景観工学、歴史・民俗学等の共同作業の結果として行われなければならない、現にそれが実践されているのである。

脱帽ばかりしているわけには行かない。われわれも実践にとりかからなければと思う。

■無いものがもう一つ

ヨーロッパの川にはススキ、ヨモギ、イタドリが無いと書いたが、もい一つ無いものがあった。それは、ゴミである。

どこへいっても、絵葉書に出てくるスイスの農村風景に出会うが、その中で作業小屋の壁に薪が積んである光景は珍しくないものだが、その積み方が凄いのである。丁張を掛けて積み上げたと思われるほど垂直でまったく乱れていないのである。

スイスの百姓魂を見る思いであった。この農民がビニール屑や、野菜屑を川に捨てる筈は無いのである。

だから、川でゴミを見付ける事は至難の技といつてよいほど、ゴミが無いのである。

15日間で得た最大の感動はこの事だと言って良い。

「川に小便をするとオチンチンが曲がるぞ」つい最近まであった日本の伝統的教えは、どこへいってしまったのだろうか。

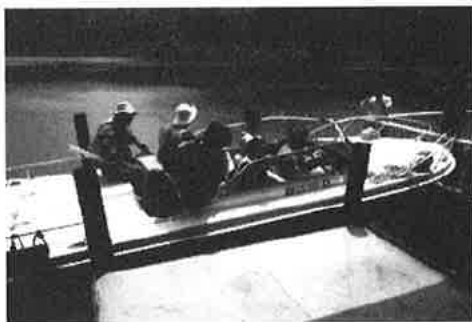
……………ひとまずこのへんで。スライドはいろいろの機会におみせします。……………

石月 升

「水中に雪椿を訪ねて」

去る5月25日、県北荒川水系大石川の大石ダムに行った。
これは2月の新潟市東地区公民館の自然セミナーで、建設省OBの石月さんの「大石ダムでは水中にも雪椿が咲く」というお話から実現した。満水と放水をくり返すダム湖の中でほんとうに雪椿は咲くのであろうか。これは是非とも実物を見なければと、受講生一同この日を持った。大石ダムは羽越水害を機に建設省によって作られた多目的ダムである。集落の移転などはなく、あたりはダム湖をたたえた広々とした公園になっていて関係の資料館などもある。

着いてすぐ事務室で説明を受け、建屋内の深く狭い階段を「下山」し、機械室を見る。再び地上に出て、今日の本命の「水中花」を観察するため舟に乗る。一般の人には湖水は出入禁止なので巡視用のボートで行く。一回約二十分弱。湖面に水脈が美しい。自分の番になった。舟は湖心から岸に近寄り、皆が行き椿を捜すが、低木の葉ばかりである。しばらくして赤い花の一つ見つけた。今年はまだ咲き終ったという。しかし、相手は自然である。雪椿は大雪の今年も自分の時に合わせて静かに水中で花開いたのだ。花だけでなく、他の植物も何種かこの大石湖の中に生きているというのは何と不思議な、嬉しいことであろう。なぜここだけこのような現象がみられるのか。水温や、水や水質によるということもあるのだろうが、原因はまだ判らないという。これもまた、植物の馴化能力と共に神秘的なことではないだろうか。



ボートに乗り込み雪椿を探す

田原 富子

身の丈レベルで国際的なボランティアを！
信濃川ファンクラブニュース

去る7月7日（7月7日が、「川の日」として認定されたく、将来祭日になる可能性があります。）にファンクラブの総会が記念講演と川づくりワークショップを含めて長岡商工会議所のホールで開かれました。約30名程度の参加で水辺の会から、ファンクラブ会長でもある大熊さんと相楽が参加しました。現在、小さく産んで大きく育てる、という発足時の考え方で50名ほどの会員で、今後、徐々に会員拡大を図ることが総会で確認されました。



信濃川はこうあってほしい、ワークショップの意見を発表する中島 太郎さん

折りから、河川審議会の最終答申が発表されたことから、改めて、「川と地域との関係の再構築」が話題となりました。

記念講演をしていただいた多質 秀敏氏（早稲田大学教授/前新潟大学）が、新潟市民（新潟ボランティアセンター：略称NVC）が身の丈レベルで国際的なボランティアを精力的に実践していることの意味を、アフリカの難民の事例などを通して話されました。アフリカの飢餓が一見自然災害の様に語られながら、実際は人災であることなどを。NVCは現在、ラオスの農村の生活改善を援助する年1万ドル支援運動の延長線上で、ベトナム農村の小学校2ヶ所の建設、教材、運営を支援している。その他、その小学校の1教室分の援助を、新潟市北高校の卒業生がしたこと、身近な国際的なボランティアとして、増大する留学生の負担が大きい医療保険を援助していることを加えて、3つの柱を話されました。同じボランティア団体としての信濃川ファンクラブの今後のあり方を示唆しているようでした。

講演の後に、参加者に、全員が参加して議論を進める手法＝ワークショップ手法を体験実践していただきました。育てていくファンクラブとして、産・官・学・民のパートナーシップを実質的なものにしていくためには、会員が川づくり共通な認識を深めていく必要があります。最初に、参加者を4つのグループに分け、それぞれの似顔絵自己紹介から始まり、信濃川への想い、川づくりへの提案ラベルトークと全体会での発表をしていただきました。当然ながら、信濃川への想いにそう違いは無いのですが、大切なのは違いの無いことも確認していく作業です。「川と地域との関係の再構築」は、こんな地道な確認からしかできないのでは、と想いながらファンクラブの会議は交流会へ流れていきました。

レポート世話人 相楽 治

自然とつきあう作法を求めて (1)

人類はもともと素手で自然と向き合っていたが、さまざまな工夫を重ねる中で道具を生み出し、建造物をつくり、それらを介して自然とつきあい、文化をつくってきた。だが、近代的科学技術を手に入れてからは、いつの間にかその道具や建造物が強力で巨大なものになり、確かに大変便利になったのであるが、気が付いてみると身近な自然はもとより地球規模で自然が傷み壊れ、その一部である人間自身にもさまざまな弊害が現れはじめてきた。このことはすでに周知のことなのであるが、われわれは今の便利な生活を手放すことができず、人間同士の中でぎくしゃくしながら自然とどう付き合ったらよいか試行錯誤している現状にあるといえる。

私の専門は土木工学であり、その中でも特に河川工学を専攻しており、つい最近まで自然を克服し利用することばかりを考えてきた。近代文明は、まさにこの土木工学によって、港湾や鉄道、道路、堤防、ダムなど強力で巨大な建造物や施設を造り、自然を人間のために馴化させてきた。

この連載では、こうした建造物や施設を中心に置きながら、自然と人間関係を反省し、今後自然とどう付き合ったらよいかを考えていきたい。それらの事例として、できるだけ新潟県の自然と関係の深い建造物や施設を取り上げたいと考えている。だが、建造物を介して自然と人間関係を理解するうえで分かりやすい事例として、まず安芸の厳島から考えてみよう。

安芸の厳島は日本三景の一つであり、まさに日本文化を代表する景観を形成している。他の日本三景である松島や天橋立はどちらかといえば自然景観が卓越していると考えられるが、厳島の場合、あの海に浮かぶ鳥居と厳島神社がなければ、瀬戸内海では極く普通の景色でしかないといえる。鳥居と神社という建造物があることによって景色が引き立ち、日本三景といわれるものになっているわけである。蛇足ながら、自然の景色は赤色の人工物が入ると壊されるのが普通であるが、鳥居という建造物だけは自然が壊されることなく、日本人のみの感性かも知れないが、美しく調和しているように思われてならない。

新潟にも、建造物があることによって景色が美しく引き立てられた場合がいくつか存在していた。例えば、明治六年に県令楠本正隆が命じて造った日本最初の近代的公園である白山遊園(写真)

もその一つであろう。これはもともとあった白山神社と千本松原を利用したものであるが、広大な信濃川の流れを背景として、遠くに弥彦山と角田山が借景とされ、近くには県政記念館があり、まさに美しい景観が造られていた。



日本最初の近代的公園である白山遊園

この美しい景観が今は存在していない。われわれは、土地を寸断利用するという近代化の中で、信濃川を狭め、堀を埋め立て、これらの美しい財産を失ってきた。しかも残念なことに、われわれはそのことにまだ十分気づいておらず、ますます景色を壊し続けているのである。その証拠は山、川、海の各所に見られるのであるが、ラムサール条約の登録湿地として国際的に注目を集めている佐潟もその例に漏れないのである。すでに本紙でも何度か指摘されているように、佐潟の岸辺に立って眺めると、新潟県人にとって故郷の象徴といっぴり弥彦山がゴルフ練習場のネットによって遮られ、景色が台無しになっている。さらに、その夜間の照明は佐潟を晦(ねぐら)にする白鳥にとってどんなに迷惑なことか想像に難くない。

われわれの社会は、市町村で景観条例などが制定され始めているけれど、まだこのような景観を害する建造物の立地を前もって防ぐ感性和手立てを基本的に有していないのである。せめて、ゴルフ練習場の耐用年数のおとずれるころまでに、それが可能な社会に成熟し、佐潟を美しく復元したいものである。

建造物と自然が共生していくためには、景色を引き立てないまでも、建造物が自然と調和していることが必要不可欠である。そうすることが、自然に対する最低限の作法でなかるうか。

大熊 孝

(新潟日報連載文より、月1回掲載中)

イバラトミヨ観察会

1996年6月23日中条町の地元で行われた、マリンピア日本海の主催の「湧水域に見られる水生生物とその環境」と題する自然観察会に、長男の龍太と一緒に参加した。マリンピア日本海の内山さんはじめスタッフの皆さんと地元の方々にはお世話になりました。ありがとうございました。

イバラトミヨはトゲウオ科のトミヨ属にトミヨと一緒に分類されている。冷たく、きれいな湧水が生息地で最近特に少なくなっている。この中条町ではイシャジャともいわれ、その謂れは背中刺が医者を持っている注射針のようだからと佐藤 正さんから聞いた。



イバラトミヨを観察する子供達。旧大崎小学校にて

マリンピアを出発し、15家族とスタッフを乗せた観光バスが到着したところは、ミズバショウで新潟県の天然物指定を受けているところだ。

あたりはヨシがはえ、ミズバショウはどこどころ大きな葉ばかりがお化けキャベツのような姿を見せている。ヤナギの木やハンの木がまばらにあるあたりが、ミズバショウの生育にはいいらしい。

あちこちで湧水が出ているので、歩くとトノサマガエルが飛び跳ねる。水たまりをのぞき込むと、どうやら、ヨコエビやトビケラの仲間が泳いでいる。水温は13.8度とずいぶん冷たい。「どっこん水」と名づけられ、ポリ容器で販売されている水だ。目指すはイバラトミヨだが、まったく魚影はない。冷たすぎ、きれいすぎるのだ。

付近の小川でタモ網を使い、ドジョウすくいを行う。道ばたの小川とヨシ原のすぐ脇の小川では水温に違いがある。それぞれ、17.7度と15.6度だ。流れも道ばたの方が水量、流速とも勝っている。しばらく子供たちと

一緒にザブザブと水に入り、獲物を追う(ただし、私は写真を撮っていただけ)。どうやらイバラトミヨの生息には後者の小川の方が向いていたようだ。イバラトミヨだけでなく、ホトケドジョウも一緒にとれるヨシ原の小川の方が、生物の種類、個体数とも多いことがわかった。

こんな貴重な小川も三年後には圃場整備でコンクリート固めにされてしまうと聞いた。私の長男の感想は「イバラトミヨがさわられて良かった」であった。イバラトミヨは一体どこで生きていくのだろうか？

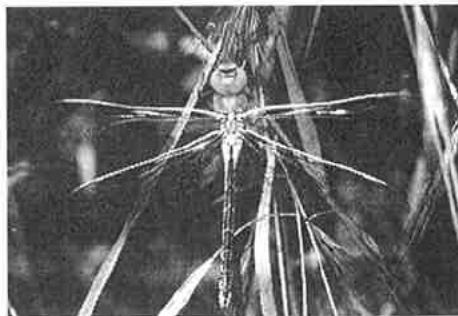
高橋 正良

ギンヤンマ

ギンヤンマを上手に捕まえることが、ガキ大将の重要な資格要件だった。かぶと虫とともに子供たちの憧れの昆虫だったこの種も、めっきり少なくなってしまった。

腹長が6cmにも達する大型のヤンマで、腹部第3節の下に強烈な印象を与える銀白色の紋がある。

陽が昇りはじめたころ、イネ科の草本群落に羽化直後の羽を休めているところを見つけて、シャッターを押す。トンボ釣りの頃が甦る。数時間後には、少年たちの憧憬と胸の高鳴りを全身に受け止めて飛翔を始める。



1996年7月 松浜の池

石月 升

ヤマセミ号 今回も決勝進出できず

7月28日(日)六日町の三国川ダムしゃくなげ湖で、Eボート大会が行われました。このイベントは7月21日から7月31日までの森と湖に親しむ旬間のしゃくなげ湖フェスティバルの一環で行われたものです。

昨年はカワセミ号で出場しましたが、ヴィにひっかかって予選落ちでした。今年は名前を変えたら多少良くなるかなということで、ヤマセミ号と名付けました。

出場チームは14チームでした。新潟の水辺を考える会からは、相楽 治、めぐみ、遼太郎、賢太郎、佐藤(父)、(娘)、(息子)、山浦、荻山、荘司、武田、杉山が参加しました。Eボートは10人1組(漕ぎ手8名、舵取り1名、かけ声・旗もち1名)。

インストラクターに舟の漕ぎ方を教えてもらい、1回戦に出場しました。レースは片道200mを往復し、1レース4〜5艇で行います。練習のときは大丈夫かなと思いましたが、舟着き場からスタート地点に行くまでになかなか息があつてきたので、これはいけると思っていました。しかし、本番でなぜか舟は右へ右へと進んでしまい、4チーム中最下位でした。原因としては、メンバーの体重バランス、漕ぎ手のパワーバランスがうまく取れていなかった様です。(「全く私の責任」ラダー担当相楽)



ヤマセミ号に乗り込むクルー

敗者復活戦には、1回戦の反省を元に、若干のメンバーチェンジとポジション替えをして望みました。今度は武田ラダーマンがなかなかうまくいったようで、舟はまっすぐ進み、折り返しまでは、どのチームも接戦でしたが、折り返して、ヤマセミ号は信濃リバーズチームと衝突してしまい、折り返したときには、すでに1艇がゴールしようとしていました。ヤマセミ号は敗者復活戦は2位で決勝進出なりませんでした。

レースの後、クルーは、一回戦よりも敗者復活戦の方がうまいだったので、みんな大満足で、良い汗をかいた暑い一日でした。

杉山 泰彦

ふるさと新潟水環境フォーラム 「恵みある自然豊かな水環境を目指して！」

イベント情報にも掲載しています「ふるさと新潟水環境フォーラム「恵みある自然豊かな水環境を目指して！」」が行われます。

大熊代表がコーディネーターということもあり、改めてページを設けて詳しく紹介いたします。

- 開催日時 1996年9月1日(日)9:45~16:45
- 開催場所 新潟市民プラザ
(新潟市西堀通6番町866番地、NEXT21ビル6階)

●テーマ
「恵みある自然豊かな水環境をめざして！」

●プログラム

一映写会一

- ・9:30 開場
- ・9:45~12:30 映写会「柳川掘割物語」
水と人々の生活との関わりを描いた宮崎 駿制作、高畑勲脚本・監督の力作、優秀映画賞賞会推薦・全国高等学校視聴覚教育研究協議会推薦・'87年度毎日映画コンクール教育文化映画賞

一フォーラム一

- ・13:20 開会
- ・13:20~13:30 挨拶(新潟県知事・新潟市長)
- ・13:30~14:30

基調講演「水がむすぶ生命の環(わ)」

講師/村田 真一氏 NHK「生きもの地球紀行」担当ディレクター昭和32年、長岡市生まれ。東京大学農学部林学科卒業後、NHK入局。「自然の744日」「ウツチン」「生きもの地球紀行」など一貫して自然番組の制作を担当。

現在、番組制作局科学番組部自然班ディレクター。

- ・14:30~14:45 休憩
- ・14:45~16:45 パネルディスカッション

●テーマ「恵みある自然豊かな水環境をめざして！」

●コーディネーター 大熊 孝 新潟大学工学部教授

●パネラー 福島湯ファンクラブ代表(豊栄市)/鳥屋野湯21世紀の会代表(新潟市)/新潟県丸の会代表(越路町)/魚野川を育む会代表(六日町)/はもちみらい塾代表(羽茂町)/大島村長/新潟県環境生活部環境対策課長

・16:45 閉会

●参加費：無料(入場可能者数500名)

主催者/申込先：新潟県環境生活部環境対策課水環境係

〒950-70新潟市新光町4-1

電話025-285-5511(内線2716) FAX025-283-5879

会員紹介

MEMBER'S

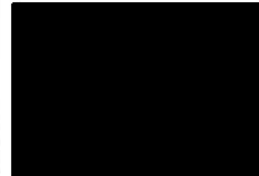


八木 栄子



会設立時より、グリーンシグマ退社まで事務局をしていましたが、今はあまり真面目でない一会員です。只今、定職がないために11月末のラムサールのシンポジウムの新潟分の雑務一般をすることになりました。こちらもよろしく。時々友人と「海の家企画」をしています。

川瀬 悦郎



市役所の研修で、グリーンシグマの森本さんの講義を聞いた。その足で入会しました。学生時代から環境問題に興味をもっておりました。特に今は、「近自然工法」というものに関心があります。趣味は山歩き、カヌー、旅行、キャンプ、焚火、暴飲暴食。

丸山 清英



川（主に信濃川、千曲川、姫川、荒川）との付き合いは、今年でちょうど30年になりました。この間、砂防やダム現場での生活が長かったこともあり、溪流釣りや山菜採取が趣味になりました。しかし、最近は溪流の汚れも目立ってきて・・・。

木村 和宏



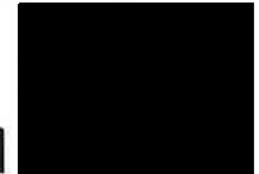
大地震の1年後に建設労働者として神戸市に転勤して来ました。美人の数では負けないものの身近に川がなく信濃川のやすらぎ堤の価値を感じます。こちらのボランティア活動もチビチビ調べてみます。

小川 二郎



25年前の学生の頃、「ダムと海岸浸食の因果関係」のレポートを書き、建設省の人に怒られる。今なら受け入れられることも当時は異端であった。当年45歳、三条生まれ。唯摩経「不二法門」の考え方が好きな自由人。私の好きな水辺／三条市・五十嵐川、信濃川の合流点からみた弥彦山の風景・渡良瀬橋の五十嵐川の川原／分水町・大河津分水からの与板橋をみる信濃川の風景

井良沢 直也



魚沼地方の河川上流域において土砂災害防止を担当。栃尾市生まれで、刈谷田川で泳いだことが思い出。溪流の魅力を活かす砂防施設を思案中。私のイチ押しの水辺は向松川溪谷（守門村）。住民と水辺とコーディネイトをしようとする本会の活動に期待しています。

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 第9回「どんつき祭」日本海に浮かぶアイガウ

日時 ● 1996年8月17日(土)～8月18日(日)
場所 ● 小針浜・新潟市寺尾中央公園 参加費無料
内容 ● 花火大会17日午後7時30分～/どんつき18日午前11時～
主催者：消防記念新潟保存会・一審会 (025-260-1203)

2 地球の祝祭。アース・セレブレーション

日時 ● 1996年8月19日(月)～8月25日(日)
場所 ● 佐渡ヶ島小木町
内容 ● エント/フジ/講演/映画/写真展/鼓童村公開/ワ
-グジョブ/参加費：有料・無料もあり/主催者：ア
-ス・セレブレーション実行委員会 (0259-86-3630)

3 水辺の楽校シンポジウム調布'96 学校と水辺の新しい関係

日時 ● 1996年8月24日(土)午後1時～午後5時30分
場所 ● 調布市文化会館たづくり2F くすのきホール
内容 ● 学校と水辺が一体化することにより、地域の自然・文化の再
生、環境教育への大きな役割が期待される。建設省の新規施
策である水辺の楽校プロジェクトについての説明、事例の発
表、パネルディスカッションが行われます。資料代 300円
水辺の会・みくり(こうの) (0424-87-3091)

4 横田切れ100周年記念事業「こども河川ふれあい塾」

日時 ● 1996年8月26日(月) 午前9時30分
場所 ● 大河津分水資料館
内容 ● オリエンテーション(ゲスト清水國明)、川の歴史(大津資料館
館長)、川の科学塾(大熊 孝)、川の生き物塾(石月 升)、川の遊
び塾(杉山泰彦)主催 横田切れ100周年実行委員会/本誌発刊以
前に定員一杯になったため、参加受け付けは行っていません。

5 ふるさと新潟水環境フォーラム「恵みある自然豊かな水環境をめざして！」

日時 ● 1996年9月1日(日) 午前9時30分
場所 ● 新潟市民フアラ (NEXT21 6F)
内容 ● 映画「柳川振替物語」/基調講演「水がもたらす生命の環(わ)」村田真一/
/「水」(対談)「恵みある自然豊かな水環境をめざして！」/参加費：無
料/主催者：新潟県環境生活環境対策課 (025-285-5511内線2716)

6 千葉工業大学文化講演会

日時 ● 1996年9月1日(日) 午後1時～
場所 ● 新潟ミナミプラザホール 3F
内容 ● 「1964年新潟地震についてあらためて考える」～1995年阪神・淡路大震
災の教訓を踏まえて 講師 長橋純男(千葉工業大学建築学科教授)パ
ネルディスカッション「考えよう信濃川と私たちの未来」パネラー 阿
達秀昭(新潟日報社報道部長)、五十嵐祐司(東邦産業株式会社代表取締役社
長)、西本晴男(北陸地方建設局信濃川下流工事事務所長)、コーディネ
ーター 島 正之(千葉工業大学土木工学科助教授) (開) 千葉工業大
学文化講演会事務局 (0474-78-0244) 新潟事務局 (025-274-0342)

7 阿賀野川舟下り

日時 ● 1996年10月12日(日)
場所 ● コース：阿賀野川沢海床固より下流
内容 ● 蒲原塾、ディスカバー亀田、新潟の水辺を考える会3
グループ協同で現在企画を進めています。

書籍情報

1 「フィールド総合図鑑 川の生物」

著者 ● 杉山 恵一(監修)
出版社 ● 山海堂 (3,193円)
内容 ●



日本の河川で見られる植物、陸生昆
虫、水生昆虫、魚類、鳥類、両生類、
爬虫類、哺乳類などを、上流、中～
下流、河口域で分類した図鑑です。
それぞれ写真を中心に生活形態、生
息環境、食性なども簡潔に提示して
あります。サイズも野外に持ち歩く
には手軽な大きさです。また、ここ
で取り上げられている植物・生物に
ついて詳しく調べるための、「川の
生物図典」(編者、出版社は共に同
じで19,776円)も同時に刊行されま
した。

新潟の水辺99選 歴史を伝える小阿賀野川の自然

河川は川の道として古くから重要な交通機関であり人々の生活必需品、産業物資を搬送する高速道路であった。昭和30年代頃から機械化の急速な進歩による自動車道路網の整備、搬送車両の大型化が進み、いつの間にか川の道から船便の姿が消えた。

また今から、30年ほど前まで河川が何千年・何百年かけて作った原始遺産、石や砂利、砂等、川の資源をなんの抵抗もなく大量無差別に採掘した時代、活躍した鉄鋼川船(コレンボ約30ト)最後の川港と最後のコレンボの造船所(中川造船)最終造船は昭和62年であった。

星島 卓美



.....会員の皆様へ.....

勤務先の異動、引っ越しなどで住所、連絡先などが変わられた方は至急新しい住所などを事務局にご連絡下さい。

また、随時催し物等の案内をFaxや電子メールで連絡できるように進めています。Faxを新しく入れられた方、インターネットやパソコン通信に加入された方は、Fax番号やメールアドレスを連絡下さい。

すばる —がんばれ 素晴君—

新聞などでご存じの方もいると思いますが、7月22日、会員の高橋 裕雄さんの長男、高橋 素晴君(14歳)がヨットで単独太平洋横断の旅に出発しました。約60日の旅になるそうです。航海の無事と成功を願い、応援しましょう。

編集後記

今回は8月2日から徳島で行われる水郷水都全国会議に間に合わせるために、なかなかあわただしい編集作業だった。期間が短いにもかかわらず原稿をいただいた方ありがとうございました。この頃は原稿をいただく方がある程度固まりつつあるので、もっと多くの方から気軽に投稿いただければと思います。

水辺に出かけることも多い季節、水難事故と日焼けとビールの飲み過ぎには気をつけましょう。

編集長(長)代理 現場の人 杉山泰彦

●事務局 〒950 新潟市大学南1丁目7821-5 (株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134

●編集 〒950 新潟市河渡2-2-8 (株)サザンウインド内 Phone 025-271-7515 Fax 025-271-1884